

ベンチャービジネス・レビュー第16号刊行に当り

ベンチャービジネス研究所所長
経営学部 教授 村上 喜郁

ベンチャービジネス研究所所長の村上喜郁でございます。はじめに、2024年1月1日に発生いたしました「令和6年能登半島地震」でお亡くなりになった皆様のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様の生活の復旧、並びに地域産業の早急な復興を祈念いたします。

2023年度は、全世界で猛威を振るったコロナ（COVID-19）禍から脱して、まさに「アフターコロナ」の年であったと感じております。新型コロナ蔓延を契機に、我々の生活様式は大きく変容し、「働き方改革」、「DX（Digital Transformation）推進」を中心としたビジネス・モデルの大きな変化なども、社会にかなり定着してまいりました。当研究所、また追手門学院大学の所在する関西では、2025年の「大阪・関西万博」も近づき、遅れを見せつつも、その準備は着々と進んでおります。加えて2023年は、スポーツ界においても日本シリーズが阪神対オリックスの「関西ダービー」となり、阪神タイガースが18年ぶり2回目の日本一の座を獲得するなど、関西地域には明るい話題のある年となりました。この様に、日本経済、特に関西経済には明るい兆しが見え始めているのではないのでしょうか。

大きな社会変革の時期は、企業にとっての「危機」と「機会」が隣り合わせで存在します。社会変化の大きな波に乗るのも、その波を創り出すのも、企業であ

り、企業は社会・経済のエンジンとして、新たな事業、そして新たな価値を創造していくものであると、私は考えております。当ベンチャービジネス研究所も、地域の力となる企業に目を向け、研究・地域連携活動を今後も続けていきたいと思います。ベンチャービジネス研究の紀要、第16号となる本誌におきましては、不動産取引現場における現実的課題、学生による地域活性化活動とクラウドファンディング、地域遺産活用に係る施設の問題、会計学と心理学の学際的研究と本研究所以の多様な素早い論考を投稿いただいております。改めまして、ここにお礼申し上げます。加えまして、本誌の「活動報告」では、2023年度の追手門学院大学ベンチャービジネス研究所の活動概要も掲載していますので、あわせてご覧いただければありがたいと存じます。

最後となりますが、追手門学院大学ベンチャービジネス研究所の活動にご協力いただきました、茨木商工会議所、茨木市、大阪市、北おおさか信用金庫、株式会社サイネックス、一般財団法人教育振興財団、フジテック株式会社、アプリル株式会社、株式会社明光ネットワークジャパン、ご協力いただきましたすべての関係者の皆様に、この場をお借りして心からお礼申し上げます。